

英文解釈：『大いなる遺産』第2章

宇佐見 太一
(関西大学)

1.

英国ヴィクトリア朝時代の作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の後期の代表作『大いなる遺産』 (*Great Expectations*, 1861) の邦訳としては、日高八郎訳 (中央公論社)、山西英一訳 (新潮文庫)、山本政喜訳 (角川文庫)、田辺洋子訳 (溪水社)、佐々木徹訳 (河出文庫)、石塚裕子訳 (岩波文庫) の6種類が現在でも容易に入手できる。日本の読者にとってその中のどれが一番しっくり行くかは、読み手自身の好みに拠るであろう。

明治以来の日本の「英学」は、基本的には、英文学と英語教育とが不可分であり、渾然一体であった。しかるに明治後期からは学術専門分野として英文学と英語学とが各々自立しだし、たとえば50年ほど前の筆者の学部時代は、その二つの学問領域は英文科において栄華を極めていた。だが、その後は時代の要請もあり、新興の英語教育学が台頭し、二十一世紀の今日に至っては活気のある英語教育学がこれまでの英文学や英語学を凌駕してしまった。実際のところ、今の日本の大学英語教育の現場に於いては、特に英文学の存在感がすっかり薄れてしまった感は否めない。文学部英文科という伝統のある組織自体も消滅の危機に瀕しており、かつて教養英語と称した共通外国語科目の「英語」の授業で英米文学の作品を教材として扱うことも今では皆無に等しくなった。

こうした現況下、洗練された言語表現の総体として英文学作品を捉えている筆者は、たとえ非主流・傍流・時代遅れなどと侮られ罵られようが、筆者なりの教育的信念・信条に基づいて本務校の外国語学部の専門演習と卒業演習では英米の文学作品を積極的に取り上げ、英文テキストの精読・読解作業に腐心している。「言語」と「文学・文化」の融合、言い換えれば、Language Arts と Liberal Arts の有機的結合を目指している、と言ってもいいだろう。

なるほど昨今の英語教育学の風潮から言えば、我々英語教師には英文和訳や英文解釈といったものではなく、速読即解のような授業形態が求められるであろうが、筆者は、世間の厳しい批判は覚悟の上で敢えて教室では遅読を実践している。遅読・精読を基礎にした昔ながらの地味な英文解釈の授業である。ディケンズの『大いなる遺産』に関しての上記の6種類の翻訳本をつぶさに参照しても、なおかつ日本の読者には意味不明の箇所を徹底的に深く読み込む作業を筆者は実践している。「脚本を基にして役者に演技をつけてゆく映画監督の姿をイメージしてテキストと向き合え」、と筆者は譬え話を駆使して学生に助言している。「登場人物の動きや情景描写等を映画監督たる者は熟知している必要がある」と、また、「いい加減な作品解釈では映画監督は務まらない」などと言いながら。

2.

作品『大いなる遺産』は、数あるディケンズの小説のなかで必ずしも長編小説とは言えないが、それでも59章まであり、ふだん文学作品とは縁遠い今どきの日本の大学生にとっては読了するには大部の著作である。それゆえ筆者の授業ではいくつかの章のみを重点的に取り上げ、あとの章の読解は翻訳本で済ますように指導している。本作品の第1章は、作者ディケンズが推敲に推敲を重ねたであろう、精緻をきわめた明晰な英文で綴られており、重厚な象徴主義的解釈を可能ならしめる荘厳な趣の章である。初読の学生に与える感動は並々ならぬものであろう。それに続く第2章は、主人公ピップ (Pip) の住居での具体的な生活形態を活写したものである。ピップと義兄のジョー・ガージャリー (Joe Gargery)、そしてジョーの妻でありピップの実姉であるジョー・ガージャリー夫人 (Mrs. Joe Gargery) の家庭内での日常的光景が描かれている。この章は決して観念的・抽象的な場面ではなく、英国の一般労働者階級の人々の生活臭が滲み出ている具体的な日常的場面の描写ゆえ、たとえ当時の労働者階級の風俗・風習をよく知らなくとも日本のコモンリーダーには映像が自ずと浮かび上がってくるだろう、と筆者は確信していた。ところが現実には、大学生にとってこの場面の理解は意外にも難解で、けっこう骨の折れるシーンのようである。それは彼らが「書かれた英語」、特に古典なるものにしんから慣れ親しんでいないことに起因するかもしれない、と筆者は考えている。彼らとの授業を通じて筆者が知った、彼らにとって今ひとつ理解しがたい英文の具体例を以下にいくつか取り上げ、教室での英文解釈の授業の一端をここに披露したいと思う。

第1章は、偶然出くわした脱獄囚マグウィッチ (Magwitch) から「明朝に鎗と食糧とを持ってこい。約束を違えたならおまえの肝臓と心臓とをくり抜くぞ」と脅された主人公ピップが、一目散に自宅に逃げ帰る話である。第2章は、その後の事の顛末が綴られる。帰宅したピップの姿を見た義兄ジョーは、ピップの実姉ジョー・ガージャリー夫人がものすごい剣幕でピップを探しに出かけたぞ、とピップに忠告するが、その直後、ジョー夫人は家に戻ってくる。ピップの身を案じたジョーはピップに、姉さんが帰って来たからドアの後ろに隠れろ、と諭す。英文は以下の通りである (テキストは、*Great Expectations*, The Oxford Illustrated Dickens, 1973. を用いる)。

Get behind the door, old chap, and have the jack-towel betwixt you. (p. 7)

学生たちが戸惑うのは、and 以下の英語である。彼らには鮮明な映像がなかなか目に浮かばないようである。その結果、どう和訳していいのか迷ってしまうらしい。たとえば佐々木徹訳であれば、「ドアの陰に隠れるんだ。タオルの後ろ！」だし、石塚裕子訳であれば、「ドアの陰に隠れろ、さあ、ほら。回転タオルの奥に紛れこむんだ」だが、受講生たちは、この英語表現からなぜこのような日本語訳になるのかがわからないようである。この英文か

ら日本語訳の意味するイメージが湧いてこない、と彼らは嘆く。そこで筆者は彼らに、英語の *betwixt*、すなわち *between* について中学レベルのごく基本的な語彙解釈をする。「英語の *between* のあとには必ず複数概念の名詞が来るので、この場合の *you* は複数形の *you* であり、具体的にはピップとジョー・ガージャリー夫人を指す。このことをしかと踏まえれば自ずと上記の二つの翻訳文の意味もわかるし、たとえば、長タオルを使って身体を隠せ、とでも訳したらもっとわかりやすくなるのではないか」、と筆者は提案する。要は、英語の *between* の基礎的用法の認識が彼らには欠如していたのである。「ジョー・ガージャリー夫人とピップとの間に長タオルを置く」、という基本的意味が学生にはわからなかったのである。

次に、固有名詞の前につく不定冠詞の *a* が持つ独特の意味合いが理解できなくて困り果てる学生がいる。ピップの実姉ジョー・ガージャリー夫人が、税が上がらない夫のジョー・ガージャリーについて愚痴をこぼすシーンが、それである。英文は以下の通りである。

It's bad enough to be a blacksmith's wife (and him a Gargery), without being your mother. (p. 7)

この英文の佐々木徹の訳文は、「鍛冶屋の嫁というだけでもたいがいなのに、その鍛冶屋がガージェリーで、そこへもってきて、お前の母親役をさせられたんだからね」である。これは、言い得て妙の名文だと筆者は思う（訳者の佐々木徹は、「ガージャリー」ではなく「ガージェリー」という片仮名表記を採っている）。しかしこの場合、なぜ固有名詞 *Gargery* に不定冠詞の *a* がついているのかが学生にはわかりづらいようである。そこで筆者は、敢えて直訳的に訳してみて、そこに皮肉のニュアンスがあることを感じ取って欲しいと、教示する。筆者のこの不定冠詞 *a* のついた箇所を試訳は、「鍛冶屋の妻であるだけでも悪いのに、とりわけその鍛冶屋がガージャリーとかいう人であれば、もう最悪だわ!」となる。ここには、*'happen to be a Gargery'* といったニュアンスが感じられることを学生に伝授したいと思う。

続いて、学生にとって情景が鮮明に浮かんでこないというさらに別の例を挙げたい。ピップは明朝、約束通り囚人に食糧を届けなければならないという使命感から、己の取り分である夕食のパンを食べずにこっそりとズボンの中に隠そうと決心する。ところがこれを行動に移すのは至難の業である。なぜかと言えば、習慣的に毎晩、ピップとジョーは、お互いに自分のパンを見せ合って食するからである。ピップは、片方の膝の上にはティーカップを、もう片方の膝の上には手つかずのバターつきパンを置いて、じっとしている。なんとかしてこの状況のもと、ジョーの目を盗んでパンを己のズボンの中に隠さねばならない。作者ディケンズの英文は以下の如くである。

I took advantage of a moment when Joe had just looked at me, and got my bread-and-butter down my leg. (p. 9)

佐々木徹訳では、「ジョーがこちらの様子をうかがった後、視線を元に戻した瞬間を狙って、パンをズボンの足に隠した」となる。ここで学生が言うには、「視線を元に戻した瞬間を狙って」の意味がわかりづらいとのことである。実際のところ、これには補足説明が要るだろう。この箇所の英文を直訳すれば、「ジョーがまさに僕の顔を見たとき」だが、これは次のような状況ではなかっただろうか。つまり、「ジョーは、これまでは僕の膝の上に置いた手の様子を見ていたが、そこからジョーの視線が上に上がった瞬間を利用して」ということ、換言すれば、「膝の上に持っているパンからジョーの目が逸れた瞬間を利用して」ということではないだろうか。筆者は学生に、そのような説明を施している。

第2章の物語の日時はまさにクリスマス・イヴの12月24日で、翌日のキリストの降誕祭のために調理中のプディングをピップは夜の7時から8時まで、棒でかき混ぜねばならなかった。ズボンの中にこっそりと隠したパンがずり落ちないように注意しつつ行うその作業は、ピップにとって大変だっただろう。それを作品の語り手は、次のように表現している。

I tried it with the load upon my leg (and that made me think afresh of the man with the load on *his* leg), and found the tendency of exercise to bring the bread-and-butter out at my ankle, quite unmanageable. (p. 11)

‘I tried it with the load upon my leg’に関する和訳としては、たとえば佐々木徹訳では「重荷を足にのせたまま仕事をし」であり、田辺洋子訳では「片脚に荷を乗つけたなりやりこなそうとした」であり、石塚裕子訳では「脚に重荷をつけたまま、やっているうち」であるが、日高八郎の「隠したパンという重荷を足につけたままやったが」という日本語訳が筆者には最適と思われる。なぜなら、「隠したパンという重荷」という表現がふるっているからである。そして、この箇所の英語表記から私たちは、ピップが立ったまま作業をしていることに気づかなければならない。ピップは立ったまま作業をしているので、足首(ankle)にパンがずり落ちそうになっているのだ。もし彼が座って作業をしていたなら、パンが足首(ankle)に落ちるわけがないだろう。さらにこの箇所で学生たちが特に頭をひねったのは、‘exercise’の意味である。これに関しては辞書レベルの問題ではなく、いかに文脈に即して読み進んでゆくかにすべてかかっている、と学生に教える。まさに精読、遅読を重ねてゆけば、この‘exercise’の意味は自ずと判明する、と。答えは、「プディングをかき混ぜるという行為・動き」である。

さらに私たちは、次の英文にも注視すべきである。少年の特徴と言ってしまえばそれまでもかもしれないが、主人公ピップは、ジョーになにかと質問をする。見るに見かねて姉のジョー・ガージャリー夫人は、ピップのことを質問魔だと言い、ピップのその行為を毛嫌いする。そして彼女はピップに、‘Ask no questions, and you’ll be told no lies. (p. 11)’と言った後、物語の語り手は以下のように言う。

It was not very polite to herself, I thought, to imply that I should be told lies by her, even if I did ask questions. But she never was polite, unless there was company. (p. 11)

この英文に対するどの邦訳も、筆者の目から見て、不十分なものに思えてならない。現に学生は翻訳書を参考にしつつも、この英文を理解するのに難儀している。要点は、‘imply’の主語が誰であるか、であろう。‘imply’するのは紛れもなくジョー・ガージャリー夫人である。この点を押さえておかないと、この英文は全く意味不明となる。ここは一種の三段論法であり、理屈のレベルである。まず直前に姉は弟のピップに、‘Ask no questions, and you’ll be told no lies.’（「質問は一切するな。そうすればお前は嘘をつかれることもないだろう」）と言った。彼女のこの発言は、裏を返して言えば、彼女は自分と自分で、自分のことを嘘つきだと貶めていることになる。ピップは思った、ということである。即ち、‘imply’しているのは姉のジョー・ガージャリー夫人なのである。これらを踏まえた筆者の試訳は、「僕が敢えて質問をした場合、僕が姉によって嘘をつかれるということを姉自身がほのめかしているということは、姉は自分に対して、自分は嘘つきだと侮辱しているようなものだ、僕は思った。しかし姉は、人がいないところでは、初めから決してお澄ましはしていなかった」である。この箇所は、英文の構造を押さえた上で、敢えて意識をする方が良いと筆者には思われる。

3.

上述の筆者の授業方法は、テキストの言葉に真摯に耳を傾け、丹念に読み解こうとするものであり、おそらくこれまでの日本の伝統的な域を脱してはいないだろう。筆者自身にはその自覚は充分に在る。よってこの手法は、管見の限りでは、やがてすっかり消滅してゆくであろう、そして過去の遺物になってしまうであろうと思われる。現に、日本の大学英語教育の現場に於いて英文和訳・英文解釈という作業そのものが排除されるようになってから久しい。英語の授業で「和訳」をさせること、そして試験に「和訳」を出すことは、今や禁忌となってしまった。筆者がかつて大学院の修士・博士を受験した四十数年前の日本の大学院入試問題は、長文の英文和訳と和文英訳とが主たるものであった。何時間もかけて答案用紙に向かったものである。ところが今は口頭試問が中心となり、隔世の感が甚

だしい。そんな意味では、団塊の世代に属する筆者の授業法は、最後の足掻きと言えるかもしれないし、老兵は去りゆくのみかもしれない。

ただ、このような時代にあって、一方では「訳」の効用とか「文学と教育」の融合とかを説く示唆に富む書物がいくつか出版されていることも事実である。たとえば、ガイ・クック (Guy Cook) の *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment* (2010) や H. G. ウィドゥソン (H. G. Widdowson) の *Practical Stylistics: An Approach to Poetry* (1992) などは私たちに既に馴染み深いものである。また日本では、斎藤兆史、菅原克也、山本史郎といった気鋭の英文学者たちがこの分野を主導し牽引している。彼らの一連の啓蒙活動は、現状の日本の英語教育界に一石を投じ、ささやかながらもそれを所望する人たちにとっての希望の曙光になるかもしれない。

英文学者、英語学者、英語教育学者、そしてその他の人文・社会・自然科学の領域の研究者のそれぞれの叢智を結集して、今日の日本の教育界・研究界に確たる「学知」を構築したいという大望を抱きつつ、筆者は大学の教場でひたすら英文テキストと向き合っている。ややもすれば実務教育に偏りがちな外国語学部にあって、たとえ数は少なくとも、たとえ傍流・非主流であれども、筆者のゼミを志望してくれる学生がいる限り、究極的に彼らが「心の深い人」になってくれるよう、筆者は上述のような授業を細々と続けてゆくつもりである。